

杜詩「因人」考

後藤 秋正

はじめに

乾元元年（七五八）五月、房琯が邠州刺史に左遷されると、彼を弁護した左拾遺の杜甫（七一二〜七七〇）も、六月には華州（陝西省華県）の司功參軍に遷される^①。さらに翌年、官を棄てて華州を去った杜甫は、七月には秦州（甘肅省天水市）にたどりつく。到着後、彼は「秦州雜詩二十首」（『杜詩詳注』巻七）を書いた。冒頭の一首には次のように言っている。

滿目悲生事 滿目 生事を悲しむ

因人作遠遊 人に因りて遠遊を作す

遲迴度隴怯 遲迴 隴を度りて怯え

浩蕩及閔愁 浩蕩 閔に及んで愁う

水落魚龍夜 水は落つ魚龍の夜

山空鳥鼠秋 山は空し鳥鼠の秋

西征問烽火 西征して烽火を問ひ
心折此淹留 心折れて此に淹留す

『杜詩詳注』が「首聯、赴秦之由。」（首聯は、秦に赴くの由。）と言っているように、冒頭の二句は、秦州に赴くことになったいきさつを述べていることは間違いない。それでは、「因人」とは、具体的にはどのような意味を有しているであろうか。以下、この語について若干の考察を試みたい。

一 従来の説

夏松涼『杜詩鑒賞』（遼寧教育出版社、一九八六）は、「秦州雜詩」の「因人」について、施鴻保『讀杜詩說』を引きながら、以下のようにかなり詳細に述べている。長くなるが貴重な指摘だと考えられるので、これから見てみよう。

因人、即「依人」。浦起竜認為是指其從侄杜佐。杜佐當時住在秦州東柯谷。作者在秦州時有『示侄佐』詩可証。也有人認為可能是指作者的老友僧人贊公、贊公此時也因房瑄事件牽連被貶謫在秦州西枝村居住。清人施鴻保則認為「此詩二十首、既不及所依之人、後在秦州、亦無一詩及之。當第（只）附人同行、不必至交旧好。至秦州後、即自散去、故不曰「依」、而曰「因」。」（『誦杜詩說』卷七） 拋作者「佐還山後寄三首」「西枝村尋置草堂地宿贊公土室二首」「宿贊公房」等詩叙述的希望杜佐寄米・寄雜菜以及想居住西枝村等事來看、作者在準備携家西行前往秦州之前、是有可能考慮到有杜佐等人的資助的。因此、浦說較為可信。

『杜詩鑿賞』が冒頭に引く浦起竜「誦杜心解」卷三之二は、次のように言っている。

其一為二十首之冒、首言「生事」「因人」、籠後歲身等篇。末言「烽火」「心折」、籠後悲世等篇。此蓋以自明來秦之故也。起聯字字清徹。……「因人」之人、或即指姪佐。公之來此、以姪佐在東柯也。

其の一は二十首の冒為り、首めに「生事」「因人」と言うは、後の歲身等の篇を籠む、末に「烽火」「心折」と言うは、後の悲世等の篇を籠む。此れ蓋し以て自ら

秦に來るの故を明らかにするなり。起聯は字字清徹なり。……「因人」の人は、或いは即ち姪の佐を指すなり。公の此に來るは、姪の佐 東柯に在るを以てなり。

つまり、『誦杜心解』は、「因人」を、杜甫が秦州の東柯谷に住んでいるおいの杜佐を頼つて、の意味に解していることになる。また、『杜詩鑿賞』は省略しているが、『誦杜詩說』卷七は、ここに引用されている部分の前後にも次のように言っている。改めて当該箇所を引いておこう。

秦州雜詩、第一云、「滿目悲生事、因人作遠游」。注引顧宸說、関輔大飢、故依人遠游、非謂因房瑄遠謫也。今按因人不当作依人解。依人、依藉其人也。此詩二十首、既不及所依之人、後在秦州、亦無一詩及之。當第附人同行、不必至交旧好、至秦州後、即自散去、故不曰「依」而曰「因」。後送段功曹詩、「幸君因旅客」、繞得舍弟觀書詩、「舟楫因人動」、皆即此因字。

秦州雜詩、第一に云う、「滿目 生事を悲しみ、人に因りて遠游を作す」と。注に顧宸の説を引く、関輔大いに飢う、故に人に依りて遠游す、房瑄に因りて遠く謫せらるるを謂うに非ざるなりと。今按するに人に因るは当に人に依ると作して解すべからず。人に依る

は、其の人に依藉するなり⁽⁴⁾、此の詩二十首、既に依る所の人に及ばず、後秦州に在りて、亦一詩の之に及ぶもの無し。当に第^た一人に附して行を同^とにすれば、必ずしも旧好を交うるには至らず、秦州に至りて後、即ち自ずから散去す、故に「依」と曰わずして「因」と曰う。後の段功曹を送る詩の⁽⁵⁾、「幸いに君 旅客に因る」、⁽⁶⁾「舟楫 人に因りて 動かす」は、皆な即ち此の因の字。

ここに『誦杜詩說』が節録してゐる顧宸の説は、顧宸『杜詩註解』五言律卷之三に、次のように見える。⁽⁷⁾

是年関輔大饑、生事不可問、至采橡粟以自給、則公之悲可知矣。因人作遠遊、時必有所倚託、故為此遊、此見到秦之由。諸註謂因房瑄而致遠遊非也。公豈肯以一謫怨及故人。

是の年 関輔 大いに饑え、生事 問うべからず、橡粟を采りて以て自ら給するに至れば、則ち公の悲しみ知るべし。人に因りて遠遊を作すは、時に必ず倚託する所有らん、故に此の遊を為す、此れ秦に到るの由を見す。諸註 房瑄に因りて遠遊を致すと謂うは非なり。公豈に肯て一たび謫せらるるの怨みを以て故人に及ぼさんや。

ここで否定されている、房瑄を弁護したことが原因となつて「遠遊」することになつたという説を述べている「諸註」は、黄希撰・黄鶴補注『補注杜詩』（『黄氏補千家集註杜工部詩史』）卷二十、あるいは王十朋集注『王状元集百家註編年杜陵詩史』卷九に引かれる師尹の注であり、ともに、「師曰、瑄有此遊也。」（師曰く、瑄に因りて此の遊有るなりと。）と述べている。つまり『誦杜詩說』は、「因人」とは、房瑄の事件が原因となつて、ということでもなく、また、『秦州雜詩二十首』やその後の秦州滞在中の詩に、具体的に誰を頼りにしたのかについては言及していないので、他人が杜甫一家の生活を援助してくれることを頼りにして、ということでもなく、「附人同行」、つまり、秦州方面に旅する人のあとについて、あるいは、秦州までの困難な道程をともしする旅慣れた人にすがつて、の意味に解していることになる。

これに対して、『杜詩鑿賞』は、『誦杜心解』の説を肯定しつつ、秦州に居住する贊公や杜佐の、生活上の助力をあてにして、の意味にとるべきであると指摘しているのである。⁽⁸⁾ ちなみに、鈴木虎雄『続国訳漢文大成 杜少陵詩集 中卷』（国民文庫刊行会、一九二九）は、「因人」に注して、他人の力に由る。これはその誰なるや不明なるも、

秦州に於て作者を世話するから来れというてくれし人
あるならん。

と言っているし、黒川洋一『杜甫上』（岩波中国詩人選集
九、一九五七）は、「人をたよつて。いかなる人であつた
かは不明。」と言つていて、鈴木説を踏襲しつつも、やや
ニュアンスを異にしている。

二 唐代以前の「因人」の用例

では、「因人」の語はどのように用いられてきたのであ
ろうか。まずは杜甫以前の用例から考えてみよう。

この語の出典としてしばしば引かれるのは、例えば、郭
知達編『九家集注杜詩』巻二十、仇兆鰲『杜詩詳注』巻九
がそうであるように、『史記』巻七十六、平原君伝に見える、
毛遂が、他の食客たちに語りかけた、「公等碌碌、因人成
事。」という部分である。この言葉は、『史記』には次のよ
うに見える。

毛遂左手持盤血而右手招十九人曰、公相与歃此血於
堂下。公等録録、所謂因人成事者也。

毛遂 左手に盤血を持ちて右手に十九人を招きて曰
く、公相いと此の血を堂下に歃れ。公等録録たり、
所謂人に因りて事を成す者なりと。

「因人」の部分に注は見あたらないが、「録録」に付され
た裴駰の注には、『説文解字』を引いて、「録録、随従之貌
也。」（録録は、随従するの貌なり。）と言うから、「因人」
も、他人につき従つて、他人の力に従つて、の意味である
と解してよからう。ちなみに「因人成事」の語は、庾信
（五一三〜五八一）の「為閩將軍乞致仕表」（『庾子山集』
卷七）と「周兗州刺史広饒公宇文文公神道碑」（『庾子山集』
卷七）にもそのままの形で見えている。

『文選』には、巻五十四に二例が見えている。一つは陸
機（二六一〜三〇三）の「五等諸侯論」の例である。

任重必於借力、制曠終乎因人。

重に任ずるは力を借るを必とし、曠を制するは人に
因るに終わる。

この一文は、天下は広大であつて一人では治められない
から、人の力に頼ることになることを言う。また、劉峻
（四六二〜五二二）の「弁命論」の例は、次のように言う。

然命体周流、変化非一。……或不召自来、或因人以
濟。

然れども命体は周流し、変化は一に非ず。……或い
は召かずして自ずから来り、或いは人に因りて以て濟
る。

李善注はこの部分に『傅子』挙賢篇の一文を引いている。前の一文から引いておこう。

昔世知居上取士之難、故虚心而下聽。知在下相接之易、故因人以致人。

昔世は上に居りて士を取るの難きを知る、故に虚心にして下に聴く。下に在りて相い接するの易きを知る、故に人に因りて以て人を致す。

『傅子』は、人材を採るのに、高い身分にあれば、身分の低い者の中から見出すことは困難なので、身分の低い者の力に頼って人材を召致することを言う。唐代以前の詩歌には「因人」の語は見えないようである。

三 唐詩における「因人」の用例

唐詩の用例としてまず挙げられるのは、駱賓王（六一九？～六八四？）の「春霽早行」〔『駱丞集』卷二〕である。詩における用例としては、これが最も早いものになる。

年華開早律 年華 早律開き
霽色蕩芳晨 霽色 芳晨に蕩く

……

自惟安直道 自ら惟^{おも}直道に安んじ
守拙忌因人 拙を守りて人に因るを忌^{にく}むことを

駱賓王には、「螢火賦」〔『駱丞集』卷一〕と「對策文三道」〔『駱丞集』卷三〕に、それぞれ、「因人成事」の語が見えていて、「春霽早行」も『史記』を典拠にしていることは明らかである。したがってこの詩も、主体性がなく、時流に合わせて他人につき従う生き方を嫌うことを言っている。

王維（七〇一？～七六二）の「早入滎陽界」〔『王右丞集』卷四〕には、次のように言う。

汎舟入滎沢 舟を汎かべて滎沢に入る

茲邑酒雉藩 茲の邑は酒^{すな}ち雄藩なり

……

因人見風俗 人に因りて風俗を見

入境聞方言 境に入りて方言を聞く

この「因人」は、滎陽（河南省鄭州市の西北）に着いた王維が、住民の生活ぶりから土地のならわしを觀察しようとしていることを言う。「因人」は、人々の態度や服装、挙措動作などを判断材料とすること、人々の様子をたよりにすること、と考えてよいだろう。

李白「贈張相鎬二首」〔其の二〕（『李太白集』卷九）にも、一例が見えている。

……

……

我揮一杯水 我 一杯の水を揮い

自笑何区区 自ら笑う何ぞ区区たる

因人恥成事 人に困りて事を成すを恥じ

貴欲決良図 良図を決せんと欲するを貴ぶ

……

……

この「因人」も、駱賓王「春齋早行」に通ずるところがあり、いたずらに他人にすがつて事を成し遂げようとすることを恥じると言うのである。

杜甫の詩における「因人」の例は、『読杜詩説』が言及していたように、「統得觀書、迎就當陽居止、正月中旬、定出三峡」に、あと一例が見えている。前後の句とともに引いておこう。

頌椒添諷詠 頌椒 諷詠を添え

禁火卜欲娛 禁火 欲娛を卜す

舟楫因人動 舟楫 人に困りて動かし

形骸用杖扶 形骸 杖を用いて扶く

この「因人」が、杖を頼りにするほど体が弱ってきている杜甫は、自分の力で船を漕ぐことができないので、他人に漕いで動かしてもらうことを言っていることははっきりしている。また『読杜詩説』が言及していた「送段功曹歸広州」には「因人」ではなく、末聯に「因旅客」という形

で見えているが、これも引いておこう。

交趾丹砂重 交趾 丹砂重く

韶州白葛輕 韶州 白葛輕し

幸君因旅客 幸いに君 旅客に困りて

時寄錦官城 時に錦官城に寄せよ

南方には丹砂や白葛といった貴重な特産物があるから、それらを旅人に託して成都に送ってくれまいかと依頼しているのである。

杜甫以後の唐詩中の用例もいくつか見ておこう。劉禹錫（七七二〜八四二）の「偶作二首」（其の二）（『劉賓客文集』卷二一）には、

養生非但藥 生を養うは但だ藥のみに非ず

悟仏不因人 仏を悟るは人に因らず

という句がある。これについて蔣維嵩等『劉禹錫詩集編年箋注』（山東大学出版社、一九九七）は、「悟仏、參悟仏性、仏家認為一切衆生皆有物性、須自悟、不因人。」と言い、陶敏・陶紅雨『劉禹錫全集編年校注』（岳麓書社、二〇〇三）は、「不因人、不因他人、謂須自悟。」と言っていて大きな差は認められない。悟りの境地に達するためには、他力ではなく、自力で行わなければならないことを言っているのである。

白居易（七七二〜八四六）の「和答詩十首 和思婦樂」（『白氏長慶集』卷二）の第十句にも、劉禹錫の例と同じく否定形を用いて次のようにある。

我謂此山鳥 我は謂おもう此の山の鳥

本不因人生 本と人に因よつて生ぜず

人心自懷土 人心 自みづから土を懷いだい

想作思婦鳴 想おもいて思婦の鳴を作すと

南方へと左遷される旅人がたどる道筋にある、とある山に棲む鳥の鳴き声が「思婦樂」と聞こえるのは、左遷される旅人の「憂憤」が凝縮して「精靈（鳥）」となった、つまり、鳥が人によって生じたのではなく、望郷の念を持っているから「思婦樂」と聞こえるのだ、というのである。この「因人」は、人の心のあり方が原因となつてそこから、と解してよからう。

元和十二年（八一七）の進士である潘存実の「賦得玉声如樂」（『全唐詩』卷四九〇）はどうであろうか。冒頭の四句を引こう。

表質自堅貞 表質 自みづから堅貞にして

因人一扣鳴 人の一たたび扣たたくに因よりて鳴る

静将金並響 静しずかにして金と響なきを並ならべ

妙与楽同声 妙たにして楽と声こゑを同おじくす

玉はそれ自体が音を発するわけではないので、人がたたくことによつて鳴るといふのである。¹³⁾

ついで皮日休（八四〇？〜八八〇？）の「五祝詩 五瀉舟」（『松陵集』卷五）の起聯を引こう。

何事有青錢 何事か青錢有らば

因人買釣船 人に因よりて釣船を買わん

これは、人を介して、といった意味である。¹⁴⁾

賈休（八三二〜九一一）の詩には四例がある。「感懷寄盧給琴二首」（其の二）（『禪月集』卷二四）から一例を引こう。

好更因人寄消息 好よし更さらに人に因よりて消息を寄せん

沃州歸去已蹉跎 沃州 歸去して已に蹉跎たり

この「因人」も、人づてに、人に依頼して、の意味である。

齊己（八六四？〜九四三？）の「寄顧瞻処士」（『白蓮集』卷七）の尾聯には、次の句がある。

春醉醒來有余興 春醉 醒め来て余興有らば

因人乞与武陵図 人に因より乞こめて武陵の図を与えん

この「因人」は、人に頼つて、人づてに、の意味である。最後に、晩唐五代の人とされる趙搏の「琴歌」（『全唐詩』卷七七一）の第二十七・二十八句を引いておこう。

一生從事不因人 一生 事に従うに人に因らず
健步窈雲皆自致 健步 窈雲 皆な自ら致す

この「不因人」は、人を頼りにしない、人をあてにしない、という意味であろう。

唐代までの詩における用例を見る限り、「因人」は、白居易「和答詩十首 和思婦樂」の例を除いてそのほとんどが、他人の力を借りる、他人を頼りにする、という意味で用いられていることは確かであろう。

四 「由人」との相違

乾元元年六月に華州へ立つとき、杜甫は前年の夏、鳳翔の行在所へ駆けつけた時にも同じ金光門を通つたことを思い出して、「至徳二載、甫自京金光門出、問道歸鳳翔、乾元初、從左拾遺移華州掾、與親故別、因出此門、有悲往時」（『杜詩詳注』卷六）を書き、次のように述べた。

此道昔歸順 此の道 昔歸順す
西郊胡正繁 西郊 胡正に繁し
至今猶破胆 今に至つて猶お胆を破る
応有未招魂 応に未招の魂有るなるべし
近侍歸京邑 近侍して京邑に歸る
移官豈至尊 移官 豈に至尊ならんや

無才日衰老 才無くして日びに衰老し
駐馬望千門 馬を駐めて千門を望む

この詩を見る限りでは、杜甫は華州に出された原因が肅宗にあるのではなく、自身の「無才」に起因すると考えていたことになる。さらに翌年、華州司功參軍の官を棄てて他所へ移ろうと決意したときには、「立秋後題」（『杜詩詳注』卷七）を書いて、次のように言っている。

日月不相饒 日月 相い饒さず
節序昨夜隔 節序 昨夜隔たる
玄蟬無停号 玄蟬 号ぶことを停むる無きも
秋燕已如客 秋燕 已に客の如し
平生独往願 平生 独往の願
惆悵年半百 惆悵年半百
罷官亦由人 官を罷むるも亦人に由る
何事拘形役 何事ぞ形役に拘せられん

この詩の第七句では、「罷官亦由人」と言っていることに注意したい。¹⁶⁾ここに見えている、「因人」と類似する「由人」の語の意味するところが、傅庚生『杜詩析義』の言うとおりであるとすれば、杜甫が官を罷めたのは、彼の、束縛を嫌い、自由を尊ぶ氣質に由来するものだ、ということになろう。この語は、第八句が陶淵明「歸去來兮辭」（『靖

節先生集』卷五)を踏まえていることから考えて、同じ陶淵明の「榮木」(『靖節先生集』卷一)を意識していると考えられる。

貞脆由人 貞脆 人に由り

禍福無門 禍福 門無し

この句は、固さともろさは、個人の資質によつて異なることを言う。このような意味で用いられる「由人」は、鮑照「擬行路難十八首」〈其の一八〉(『鮑明遠集』卷八)の冒頭を見れば、いつそうはつきりするだろう。

諸君莫歎貧 諸君 貧を歎ずること莫かれ

富貴不由人 富貴は人に由らず

用例は少ないが、これは唐代においても変わらない。崔湜「至桃林塞作」(『全唐詩』卷五四)の第七・八句には次のようにある。

抱冤非忤物 冤を抱くは物に忤うに非ず

權謗豈由人 謗りに罹るは豈に人に由らんや

讒言に遭つたのは、自分に原因があるためではない、と言うのであろう。つまり、杜甫は、「因人」と「由人」とをはつきり区分して用いているのである。

おわりに

「秦州雜詩二十首」には、余儀なく秦州に滞在することになった杜甫の憂愁と苦惱とがしばしば詠じられている。

西征問烽火 西征して烽火を問ひ

心折此淹留 心折れて此に淹留す(其の一)

清渭無情極 清渭は無情の極みなり

愁時獨向東 愁時 独り東に向かう(其の二)

万方声一概 万方 声一概

吾道竟何之 吾が道竟に何くにか之かん(其の四)

煙塵一長望 煙塵 一たび長望す

衰颯正摧顏 衰颯 正に顔を摧く(其の七)

俛仰悲身世 俛仰 身世を悲しむ

溪風為颯然 溪風 為に颯然たり(其の一)

車馬何蕭索 車馬 何ぞ蕭索たる

門前百草長 門前 百草長し(其の一七)

『秦州雜詩』の「囚人」が『史記』の用例の延長上にあり、しかも、杜甫自身の用法と唐代の他詩人の用法の範疇から外れるものではない以上、これが人を頼りにして、人の力にすがって、の意味であることは明瞭である。その点では『読杜詩説』の指摘は妥当であると考えられる。しかし、本来、自己の意志に忠実であろうとしていた杜甫にとつて、他人の力を頼りにして秦州に旅立つことは、そのこと自体が本意であるとする心情もこめられていたのである。結果として、杜甫にとつての秦州は、悲哀に満ちた土地であり、長期の滞在を許さなかつた。

さらにつけ加えておくならば、師尹らが「囚人」を、房琯を弁護したことが原因となつて、と解したのは、「遠遊」の語にも影響されたのではなからうか。杜詩中の「遠遊（遊）」の語について、いくつかの注が指摘しているように、確かに『楚辞』には「遠遊」がある。『楚辞』王逸注は「遠遊」について、次のように言う。

屈原履方直之行、不容於世。上為讒佞所譖毀、下為俗人所困極。章皇山沢、無所告訴。

屈原は方直の行いを履み、世に容れられず。上は讒佞の譖毀する所と為り、下は俗人の困極する所と為る。山沢に章皇し、告訴する所無し。

つまり、師尹らは、房琯を弁護した行為に対して、「讒佞」に「譖毀」されたことが原因となつて、杜甫が「遠遊」することになつたと考えたのではなからうか。

杜甫「水会渡」（『杜詩詳注』巻九）の末聯には、次のように言う。

遠遊令人瘦 遠遊 人をして瘦せしむ
衰疾慚加餐 衰疾 加餐に慚ず

また、杜甫には「遠遊」と題する詩が二篇残されていて、そのうち、宝應二年（七六四）七月、広徳と改元 春、梓州（四川省三台県）での作とされる一篇（『杜詩詳注』巻一一）の冒頭は、次のように詠じられる。

賤子何人記 賤子 何人か記せん

迷方著処家 方に迷いて著処に家とす

杜甫の「遠遊」には、確かに困難と辛苦に満ちた旅という意味がこめられてはいる。しかし、この語が、必ずしも屈原や『楚辞』と直接に結びついているとは言えない。このことも「囚人」の語を、房琯の事件を原因・契機として、と見なす説を否定する傍証となるであろう。

注

(1) 房瑄が左遷された理由については、谷口真由実「杜甫の社会批判詩と房瑄事件」(『日本中国学会報』五三、二〇〇一)に詳しい。ここでは、従来言われていた説に加えて、「どのように安祿山の乱を收拾するかという戦争方針とそれを支える経済政策について、肅宗と房瑄が決定的に異なる戦略をもっていた」ことを挙げている。

(2) 「北鄰」(『杜詩詳注』巻九)に、「明府豈辞滿、藏身方告勞」(明府、豈に滿を辞せん、身を藏して方に勞を告ぐ)と言い、「寄常微君」(『杜詩詳注』巻一四)に、「万事糾紛猶絶粒、一官羈絆実藏身」(万事糾紛して猶お粒を絶ち、一官、羈絆せられて実^{じつ}に身を藏す)と言う。この二篇を指すのであろう。

(3) 「悲世」の語は、杜詩には見られないようである。「秦州雜詩二十首」(其の二二)には、「悲身世」の語があるので、この一篇を指すのであろうか。

(4) ちなみに、李寿松・李翼雲『全杜詩新釈』(中国書店、二〇〇二)は、「依藉」の語を用いて、「因人、即依人。……滿目二句說、所見到的一切都令人悲、自己也因依藉他人而再次遠行。」と注している。

(5) 「送段功曹歸広州」(『杜詩詳注』巻一一)。

(6) 「続得觀書、迎就当陽居止、正月中旬、定出三峡」(『杜詩詳注』巻二二)。

(7) 引用は『和刻本漢詩集成 唐詩』第二輯(汲古書院、一

九七五)による。

(8) 例えば、四川省文史研究館編『杜甫年譜』(四川人民出版社、一九五八)は、「起首二句言闕輔大饑、生計艱難、不得不因人作遠遊、所謂因人、即因從姪杜佐在秦州東柯谷居住而來遊也。」と言い、王士禛『杜詩今注』(巴蜀書社、一九九九)も、「因人作遠遊、不得不前來投親靠友。」と解している。

(9) この部分の引用は、『杜詩詳注』による。

(10) 全釈漢文大系『文選七』(集英社、一九七六)は、「弁命論」の当該部分を、「他人が原因となって成り立つ場合など……。」と訳している。あるいは、他人に頼って、と訳したほうが、『傳子』との整合性があるのではなからうか。

(11) 『文苑英華』巻二八九と『全唐詩』巻七九は詩題を、「春日離長安寄中言懷」に作り、『文苑英華』は「忌因人」を「忘因人」に作る。

(12) 安旗主編『新版李白全集編年注釈』(巴蜀書社、二〇〇〇)は、「句謂恥於因人成事也。」として、『史記』平原君列伝を引く。

(13) 一句は、『礼記』聘義に見える孔子の語、「夫昔者君子比徳於玉焉。……叩之其声清越以長。」(夫れ昔者君子は徳を玉に比せり。……之を叩くに其の声は清越にして以て長し。)を踏まえる。

(14) この一句は、『世説新語』排調篇に見える、竺法深が、人を介して山を買おうとした支遁を皮肉った、次のような逸

話を踏まえるのであろう。

支道林困人就深公買印（岫）山。深公答曰、未聞巢・

由買山而隱。

支道林 人に困りて深公に就きて印（岫）山を買わん

とす。深公答えて曰く、未だ聞かず巢・由の山を買いて
隠るとは、と。

〔15〕『唐才子伝』巻一〇に、景福二年（八九三）の進士である

張鼎のあとに趙搏を載せ、「同時趙搏、有爽邁之度、工歌
詩。」（同時の趙搏は、爽邁の度有り、歌詩に工。）と言う。

〔16〕この「由人」について、例えば傅庚生『杜詩析義』（陝西
人民出版社、一九七九）の「罷官亦由人、何事拘形役」の
項は、以下のように述べている。

最末兩句、訳作白話就是、我假如高興罷官不作、也隨
我個人的自便、為什一定要拘泥着、以心為形所役、這麼
不自由呢？

実際に罷免されたかどうかは別として、「平生 独往の
願い」の句から見ても、杜甫が自身の意志によって官を罷
めたと表現していることは間違いないだろう。仮に「罷官」
を、官を罷めさせられてと解するならば、次句で「形役に
拘せられん」と言っているのとも矛盾することになる。し
たがって、「由人」も、自由を得たいという意志によって、
と解釈するのが正しいことになる。

〔17〕注（16）参照。

〔18〕例えば、『九家集注杜詩』巻二〇は、「趙云」として、「楚

辞有遠遊賦。」（楚辞に遠遊の賦有り。）と言う。

〔付記〕小稿は、谷口真由実氏『秦州雜詩二十首』小考―辺境
から杜甫が捉えようとしたもの―（二〇〇六年六月二四
日に函館で開催された、「中国文化学会大会」における口頭
発表）に啓発されて執筆したものである。ここに記して謝
意を表す。

なお、本研究は平成一九年度科研費・基盤研究C「杜甫
の詩語に関する基盤的研究」（課題番号一九五二〇二八五）
の助成を受けたものである。

（北海道教育大学札幌校）